

大学評価情報の効果的な発信とは  
—高校関係者・大学関係者の認識についての発話の質的分析より—

The impact of QA information on senior high school members:  
Gaps in mental models between senior high school and university members

齋藤 聖子  
SAITO Kiyoko

1. 問題	73
2. 調査 (1)	74
2.1 目的	74
2.2 方法	74
2.3 結果	75
2.4 考察	76
3. 調査 (2)	77
3.1 目的	77
3.2 結果	78
3.3 考察	79
4. 総合考察	79
ABSTRACT	84

## 大学評価情報の効果的な発信とは

### —高校関係者・大学関係者の認識についての発話の質的分析より—

齋藤 聖子\*

#### 要 旨

本研究では、大学評価情報の有用性に対する認識について、大学評価情報の重要性を認識している大学関係者と高校関係者を対象に調査・分析を行った。その結果、両者の認識について大きなギャップが存在するといえた。ギャップは主に以下の点であった。第一に、大学の場についての認識のギャップである。大学関係者は大学を教員が学生の能力を引き上げる教育の場として、教員主導の環境づくりを重要視していたが、高校関係者は大学を学生が切磋琢磨しながら自律的に能力を伸ばす場として、学生主導の場であると考えていた。第二に、大学関係者は教育の効果を効果的に示すためには、就職率や資格取得可能な種類数などの目に見えやすい数値に代表される短期的な教育結果を簡便的に示すことが重要であると認識していた。しかし高校関係者は短期的な結果より、就職してからの活躍や就職してから役に立つ基礎的能力を身につけられる環境について重要視しており、長期的な視野にたった情報を求めていることがわかった。

#### キーワード

大学評価情報、ニーズ分析、高校関係者と大学関係者の認識ギャップ

#### 1. 問題

現在実施されている認証評価は「大学等の教育活動の改善に資する」かつ「評価結果を公表して社会からの理解と支援を得る」ことを目的として行われている。大学設置基準の「大綱化」以来、各大学の「自己点検・評価」が義務付けられ、大学の「評価」への意識も高まり、「大学等の教育活動の改善に資する」ための評価枠組みや手法の研究、つまり「評価の実施」についての研究は数多く行われるようになってきた。しかし一方で、「評価結果を公表して社会からの理解と支援を得る」ための方策、つまり、「評価の実施後」についての研究は行われていないのが現状である。本研究ではこの点に注目し、評価実施後の効果的な情報公開や発信に焦点をあてた。

大学評価情報は認証評価をはじめとする「制度型（機関型）」と受験情報誌などによる「市場型」

による情報の二種類に分類できるが、社会に広く知られているのは「市場型」情報であり、「制度型」情報はほとんど知られていない [1]。その原因として、「市場型」情報は市場価値のあるものを評価軸としており、市場価値（社会的ニーズ）を反映しているが、「制度型」は反映していませんと考えると考えられている。しかし、一方で、「市場型」情報は評価基準が不明確で信頼性が乏しいという欠点が指摘されている。信頼性の低さは大学評価結果や、その評価を受けている大学への不信感につながる危険性がある。それでは社会から理解を得られる大学評価情報とは何か。Patton (1997) は評価の利用者のニーズに役立つ「有用性」と評価結果が十分な情報を伝える「正確さ」の両立が評価情報の社会への公開の際に必要な点であると提言している [2]。このことから社会から理解を得られる情報とは、信頼性の高い情報を市場価値の高い観点で分析した情報であるという

\* 独立行政法人 大学評価・学位授与機構 評価研究部 助教

ことができる。このことから、本研究では、大学評価情報の社会的ニーズについて焦点をあてた。本稿では、その第一段階として行った、大学評価情報のニーズが高いと考えられる高校業界におけるニーズ分析の結果を報告する。

高校業界における大学選択についての研究については、高校生の大学進学の実動機や、将来の目標について、数多くの研究がなされている [3][4][5]。栗山他 (2001) によると、高校生は、将来の目標、進学動機を経て、大学を選択する考慮条件を決定し、その条件に従って大学を決定する [6]。考慮条件は、ニーズの高い大学評価情報としても捉えることができるが、その要因としては主に、「設備の充実」「興味のある分野」「大学の知名度」「友人関係」「合格可能性」が挙げられている。大学選択に及ぼす要因の抽出は多くの研究でなされてはいるが、各要因の詳細な検討を行っている研究は少ない。マクロなニーズ把握のみでは、情報を発信する側と検索、受信する側の認識のギャップは埋まらず、効果的な情報公開が行えないことは、多くの研究により指摘されている [7]。効果的な情報公開のためには、例えば「設備の充実」の「設備」とは具体的に何を意味するかについての詳細な分析が必要である。このことから、本研究では、高校業界においてニーズの高い大学評価情報の主な要因を抽出するのみでなく、その具体的な形成過程について詳細な質的分析を行った。

## 2. 調査 (1)

### 2.1 目的

本調査では、高校関係者が考える重要な大学評価情報の主な要因を抽出し、その具体的な形成過程についての分析を行うことを目的とする。

### 2.2 方法

#### 対象

調査対象は全国の国公立の高等学校からランダムに抽出し、ヒアリング調査の依頼を行い、調査の承諾を得た高等学校の教員22名であった。教員は高等学校で高校生の進路指導を担当する教員である。なお、本調査では、普通高校 (総合科) を対象とした。

### 調査手法

本研究では、よりリアルなニーズの抽出、つまり現場の「本音」を探り出すために効果的なメンタルモデルアプローチを適用した [8]。メンタルモデルアプローチとは、従来の多くのニーズ調査でみられる質問紙調査の問題点の回避のために提案された手法である。質問紙調査の問題点とは、質問項目を事前に規定することにより、事前に想定できない新しい概念を抽出することが困難となる点である。メンタルモデル的アプローチは、1対1の非構造化面接により得たプロトコルをもとにメンタルモデルを構築していく点が特徴である。非構造化面接法とは、被験者が対象となるテーマについて自分の言葉で自由に回答する手法のため、調査者が設定している枠組みに左右されることがなく、被験者独自の枠組みを抽出でき、調査者が事前に想定できない新しい概念を効果的に抽出することができ、被験者のよりリアルなメンタルモデルを構築できる利点がある。

### 非構造化面接項目

高校関係者が重要と考える大学評価情報を面接のテーマとし、本調査では高校関係者とは、高校教員、高校生、保護者とした。参加者には調査の目的について事前説明を行い、求める自由回答について以下の順序で教示を与えた。

説明した調査の目的とは、大学評価情報についてのニーズ分析である。ちなみに大学評価情報とは、大学関係者ではない、第三者によって評価された大学情報を意味すると説明を行った。

①「あなたが考える、重要な大学評価情報とは何ですか、自由に考えていることを話してください。」

②「あなたが面接や、進路指導を通して把握している、高校生にとって重要な大学評価情報とは何かについても自由に話してください。」

③「あなたが面接や、進路指導を通して把握している、保護者にとって重要な大学評価情報とは何かについても自由に話してください。」

として、自由回答を求めた。面接者は回答者が新しい概念や言葉を発話した時のみ、その意味や、定義の確認を行った。

### 手続き

面接は、面接者と被験者 (面接対象者) の2名で行う。また、事前に参加者に許可を得て、ICレ

コーダで回答内容の録音を行った。また、面接者は被験者の発話文脈の記録を行った。参加者のプロトコルは全て分析対象とした。

### 分析方法

発話単位は基本的に発話プロトコルを一文単位で区切ったものとした。しかし、発話文脈の記録を手がかりとし、一文中で「間」（2秒以上のポーズ）、発話相手の変化がみられたときは、そこで分割した。カテゴリ分析では、発話単位ごとに2名の研究者が独立にカテゴリ分析を行った。なお、2名の研究者とは、本研究の仮説を知らない者である。

判定一致率は76%～84.2%であり、判定不一致があったものについては除外した。プロトコル分析では、判定の不一致の場合は、話し合いで判定する方法も存在するが、本調査では、話し合いのプロセスにおいて、一方の研究者が他方の研究者の意見に影響を受けるケースが頻繁にみられたため、本調査においては除外する方法をとった。

## 2.3 結果

分類されたカテゴリごとにプロトコル分析を行い、更にカテゴリ内要因のフローチャートの作成を行った。分類されたカテゴリは重要と考える大学評価情報の要因を、フローチャートは要因の形成過程を表す。分析の結果、高校生の認識について発話した高校教員のプロトコル、保護者の認識について発話した高校教員のプロトコル、高校教員について発話した高校教員のプロトコル

からは異なったカテゴリが抽出された\*<sup>1</sup>。

### 高校教員

高校教員は2カテゴリに分類された。カテゴリは「就職」「偏差値」である。

フローチャートは図1に示す。結果をカテゴリごとに示す。

#### 「就職」カテゴリのフロー

人生は長く就職までが重要ではない。就職後の状況が重要である。就職後、いかに活躍でき、職場でいかに能力が発揮できるかが重要である。能力を発揮するためには、仕事で活用できる能力を身につけることが重要である。仕事で活用できる能力を身につけるためには、就職後のための能力育成を目標とした教育プログラムが重要である。この様な意味で「就職」は重要である。

#### 「偏差値」カテゴリのフロー

大学は学生同士が切磋琢磨して成長する場である。切磋琢磨するためには学生の能力が高くなければならない。能力の高い学生が入学するためには、その大学が魅力的であることが高校生に十分に伝わらなければならない。身近な先輩である大学生が伝達する大学の魅力は高校生にとって重要な情報である。能力の高い大学生は、自律的に大学生活を魅力的にすることができる。また、能力の高い大学生は伝達能力も高いため、その魅力を効果的に後輩である高校生に伝達することができる。よって能力の高い大学生が在籍する大学には、多くの高校生が入学を希望し、選抜された能力の高い高校生のみが入学する。入学した高校生は大学

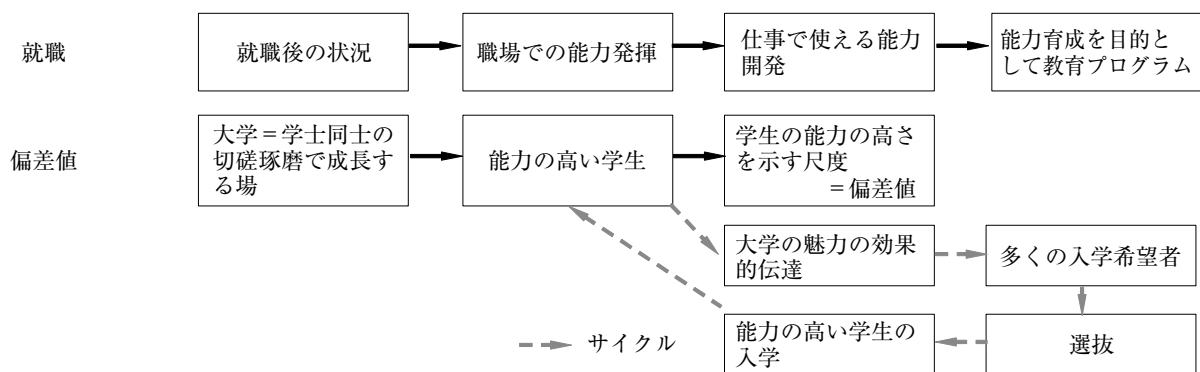


図1 高校教員のフローチャート

\*<sup>1</sup> 結果は高校教員からみた高校生や保護者の認識であり、当事者からのヒアリング結果ではないが、以下記述を簡便にするため、高校教員が発話した高校生については<高校生>、高校教員が発話した保護者については<保護者>と記述する。

生として更に自分の後輩に大学の魅力を伝達する。このことにより伝達の好サイクルが発生し、偏差値の高い大学は、更に偏差値が高くなる。このことから「偏差値」は重要である。

#### (高校教員からみた) 高校生

高校生は3カテゴリーに分類された。カテゴリーは「先輩による評価」「先輩の様子」「偏差値」である。フローチャートは図2に示す。結果をカテゴリーごとに示す。

##### 「先輩による評価」カテゴリーのフロー

先輩は高校生にとって同じ環境で生活する身近な存在である。身近な存在が持つ評価基準は自分の基準と類似している。類似した基準による評価は信頼性が高い。信頼性が高い情報は高校生にとって重要である。このことから、「先輩による評価」は重要である。

##### 「先輩の様子」カテゴリーのフロー

先輩は高校生にとって同じ環境で生活する身近な存在である。大学への進学後の先輩の様子を観察する。観察した結果魅力的に成長している場合は、同じ環境で生活する自分もその大学に進学すれば、魅力的に成長できると推測することが容易である。このことから、「先輩の様子」は重要である。

##### 「偏差値」カテゴリーのフロー

自分の選択大学が進学する価値のある大学であることを保護者に説明しなければならない。保護者に説明が容易な尺度は偏差値である。偏差値が

高ければ、保護者は子供の選択に理解を示す。このことから、「偏差値」は重要である。

#### (高校教員からみた) 保護者

保護者は2カテゴリーに分類された。カテゴリーは「就職」「偏差値」である。フローチャートは図3に示す。結果をカテゴリーごとに示す。

##### 「就職」カテゴリーのフロー

子供にとって将来の生活が保障されることが重要である。生活の保障は大企業・有名企業への就職である程度は達成される。このことから「大企業・有名企業への就職」は重要である。

##### 「偏差値」カテゴリーのフロー

社会的評価は重要である。社会的評価の高さは、子供の進学した大学で一部を得ることができる。偏差値の高い大学は社会的評価が高い。このことから、偏差値は重要である。

## 2.4 考察

偏差値については教員、高校生、保護者、ともに重要な大学評価情報であると捉えていたことが抽出されたカテゴリーによりわかった。しかし、カテゴリーを形成する要因は三者ともに異なっているといえる。保護者から抽出された要因：＜社会的評価の高さ＝偏差値の高さ＞から、保護者は偏差値尺度を社会的評価尺度であると捉えているが、高校生から抽出された＜保護者に簡単に説明したい＞から＜簡単な説明尺度＝偏差値＞へのフ

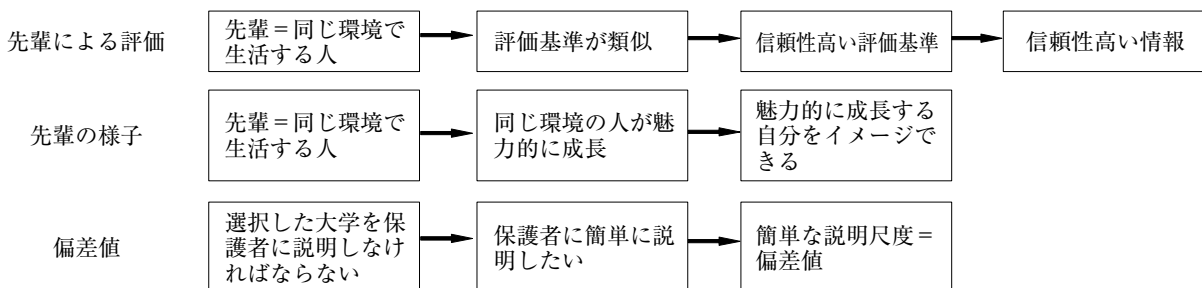


図2 (高校教員からみた) 高校生のフローチャート

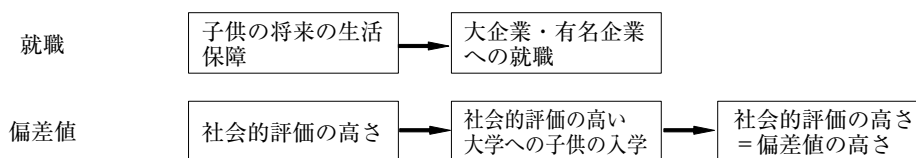


図3 (高校教員からみた) 保護者のフローチャート

ローから、高校生は偏差値を保護者を説得する単なるツールとして考えていることがわかった。また、高校教員から抽出された〈大学＝学生同士の切磋琢磨して成長する場〉から〈学生の能力の高さを示す尺度＝偏差値〉へのフローから、高校教員は「大学」という場を、学生同士が切磋琢磨しながら自律的に能力を高めていく場であるのが現状であり、大学教員が学生を教育し、能力を伸ばす場として期待はできないと捉えている傾向がみられた。つまり、高校教員は、偏差値を学生の質を表す数値として認識しており、大学の教育の質を表すものではないと考えているといえる。

就職については、高校生は重要視していないが、保護者、高校教員ともに重要な大学評価情報であると捉えていたことが、抽出されたカテゴリーによりわかった。しかし、形成過程は保護者と高校教員とは異なるといえる。保護者の〈子供の将来の生活保障〉から〈大企業・有名企業への就職〉のフローと、高校教員の〈就職後の状況〉から〈職場での能力発揮〉へのフローから、保護者は、大企業・有名企業への執着が強いが、高校教員は、大企業、有名企業への就職はゴールではなく、その後の活躍が生活の充実には重要であると捉えていた。複数のプロトコルから、大企業・有名企業へ就職しても、能力がなければ職場での居場所はなくなり、社会からドロップアウトし、結局は生活の保障は失われると認識していることがわかった。つまり、大学には就職するための支援より、就職後に生き残れる能力を育成するプログラムを高校教員は求めているといえる。

高校生についてのプロトコルから、「先輩による評価」や「先輩の様子」のカテゴリーが抽出され、高校生にとっては、特に先輩の存在が重要であるといえた。また、複数のプロトコルから、高校生は、クラブ活動等を通して信頼できる先輩を事前に自分で選別しており、選別した先輩の話のみを重要と捉えていることがわかった。

調査（１）では大学評価情報を受信、検索する側の高校業界における大学評価情報についての認識の分析を行った。調査（２）では大学評価情報を社会に公表、発信する側の大学が高校関係者が重要と考える点について、どの程度、またどの様に認識しているのかの調査を行い、発信側の大学

と受信側の高校の認識ギャップの分析を行った。

### 3. 調査（２）

#### 3.1 目的

本調査では、大学関係者が考える重要な大学評価情報の主要な要因を抽出し、その具体的な形成過程についての分析を行う。更に、調査（１）の分析結果との比較を行い、大学関係者と高校関係者との大学評価情報の重要性の認識についてのギャップを明らかにすることを、本調査の目的とする。

#### 対象

調査対象は全国の国公私立大学からランダムに抽出し、ヒアリング調査の依頼を行い、調査の承諾を得た大学教職員の21名（教員10名、職員11名）であった。なお、本調査では調査目的上、高校関係者との接触の機会が多い大学教職員を対象とした。

#### 調査手法

本調査においても調査（１）と同様にメンタルモデルアプローチを適用した。

#### 非構造化面接項目

高校関係者が重要と考える大学評価情報を面接のテーマとした。本調査では高校関係者とは、高校教員、高校生、保護者とした。参加者には調査の目的について事前説明を行い、求める自由回答について以下の順序で教示を与えた。

説明した調査の目的とは、大学評価情報についてのニーズ分析である。ちなみに大学評価情報とは、大学関係者ではない、第三者によって評価された大学情報を意味すると説明を行った。

- ①「高校教員が考える重要な大学評価情報とは何だとあなたは思いますか、自由に話してください。」
  - ②「高校生が考える重要な大学評価情報とは何だとあなたは思いますか、自由に話してください。」
  - ③「保護者が考える重要な大学評価情報とは何だとあなたは思いますか、自由に話してください。」
- として、自由回答を求めた。回答を求める前に、高校関係者は高校教員、高校生、保護者を意味するとの説明を行った。面接者は参加者が新しい概念や、言葉を発話した時のみ、その意味や、定義の確認を行った。

## 手続き

面接は、面接者と被験者（面接対象者）の2名で行う。また、事前に参加者に許可を得て、ICレコーダーで回答内容の録音を行った。また、面接者は被験者の発話文脈の記録を行った。参加者のプロトコルは全て分析対象とした。なお、2名の研究者とは、本研究の仮説を知らない者である。

## 分析方法

発話単位は基本的に発話プロトコルを一文単位で区切ったものとした。しかし、発話文脈の記録を手がかりとし、一文中で「間」（2秒以上のポーズ）、発話相手の変化がみられたときは、そこで分割した。カテゴリ分析では、発話単位ごとに2名の研究者が独立にカテゴリ分析を行った。なお、2名の研究者とは、本研究の仮説を知らない者である。判定一致率は73.8%～85.9%であり、判定不一致があったものについては除外した。プロトコル分析では、判定の不一致の場合は、話し合いで判定する方法も存在するが、本調査では、話し合いのプロセスにおいて、一方の研究者が他方の研究者の意見に影響を受けるケースが頻繁にみられたため、本調査においては除外する方法をとった。

## 3.2 結果

分類されたカテゴリごとにプロトコル分析を行い、更にカテゴリ内要因のフローチャートの作成を行った。分類されたカテゴリは重要と考える大学評価情報の要因を、フローチャートは要因の形成過程を表す。

カテゴリは4つに分類された。カテゴリは「教育」「資格」「就職」「施設・設備」である。大学関係者の認識として、高校教員、高校生、保護者によるカテゴリの違いはみられなかったが、「施設、設備」は高校生に特異的なカテゴリとして抽出された。

フローチャートは図4に示す。結果をカテゴリごとに示す。

### 「教育」カテゴリのフロー

高校関係者は自高校の卒業生が大学で質の高い教育を受けられる環境を大学に求めている。質の高い教育とは、質の高い教員の存在と、少人数教育によるきめ細かい指導であると高校業界は考えている。この様な認識から「教育」は高校関係者にとって重要であると大学関係者は考えている。

### 「資格」カテゴリのフロー

高校関係者は、大学在学中に社会での即戦力となるための能力を身に付けることを大学に求めている。即戦力があることを社会に示すには、取得した資格である程度証明できる。大学の学生に対する支援体制の充実を示すためには、取得率の高さと資格取得可能な種類のバラエティーの富んだカリキュラム構成である環境を示すことが効果的である。この様な認識から「資格」は高校関係者にとって重要であると大学関係者は考えている。

### 「就職」カテゴリのフロー

高校関係者は就職を重要視しており、そのための支援体制が充実していることを大学に求めている。支援体制の充実を示すためには、就職率の高さのみでなく、高校関係者が執着する大企業への

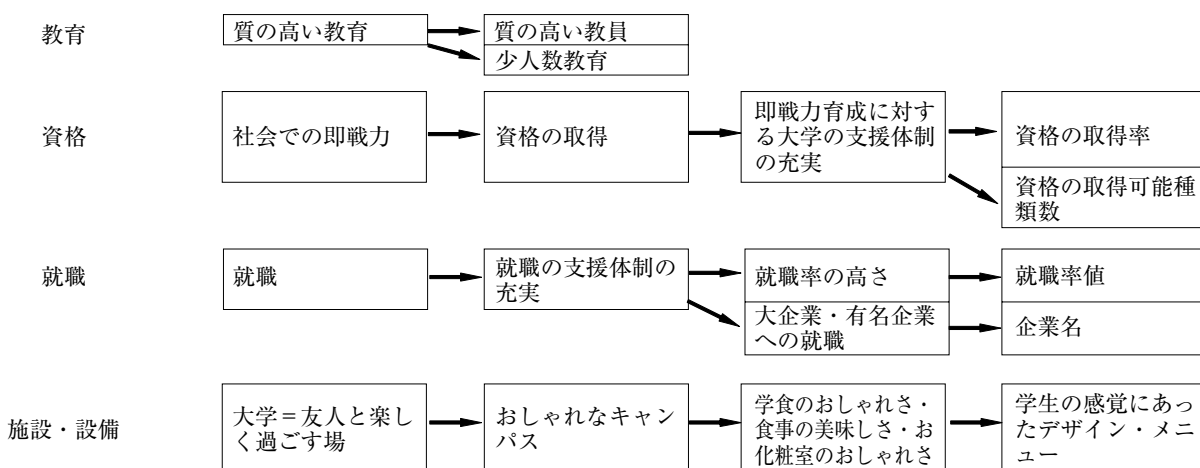


図4 大学関係者のフローチャート



就職が可能なことを説明することが効果的である。そのためには、就職率の数値と、卒業生が就職した大企業名を示すことが重要である。この様な認識から、高校関係者にとって「就職」は重要であると大学関係者は考えている。

#### 「施設・設備」カテゴリーのフロー

本カテゴリーは高校生のみにもみられると大学は考えていた。

高校生は大学を教育の場として捉えるのではなく、友人と楽しく過ごす場として捉えている。高校生の多くは、生活は<おしゃれ>に過ごしたいと考えている。おしゃれなキャンパスとは、高校生にとっては、学生食堂のおしゃれさ、食事の美味しさ、お化粧室がきれいでおしゃれを求めている。このため、大学は、学生食堂やお化粧室には今の大学生の感覚にあったデザイン、メニューにすることを留意している。この様な認識から、高校関係者にとって「施設・設備」は重要であると大学関係者は考えている。

### 3.3 考察

高校教員、高校生、保護者の三者の差異を意識した大学関係者のプロトコルが多くはみられなかったことから、重要視する大学評価情報については三者に傾向の差異はない、または、情報の公開、発信は三者を区別して行う必要がない、と大学関係者は認識していると考えられる。しかし、「施設・設備」に関してのみ、高校生の特異的なカテゴリーとして抽出され、高校生に特徴的な傾向であると大学関係者が認識していたといえる。

次に、カテゴリー分析の結果から、大学評価情報を<大学>という場は教員が学生の能力を開発し、引き上げる教育の場であるべきと高校関係者に期待されている、と大学関係者の認識していることがわかった。また、その様な場の質の保証は、<少人数教育制の整備>と<教員の質の高さ>というキーワードを高校関係者に示すことで行えると考えていた。しかし、少人数教育による効果や、教員の質を保障するために必要な要因についてのプロトコルはみられなかった。

また、<就職の支援体制の充実>から<就職率の高さ><大企業・有名企業への就職>のフローから、高校関係者はいわゆるブランド力のある大企業・有名企業への就職を執着しており、より多

くの学生をより高いブランド力を持つ会社に就職させることが、大学の学生に対する支援体制の充実を示す効果的な方法である、と大学関係者は認識しているといえた。

同時に、高校関係者は資格取得にも執着しており、<即戦力育成に対する大学の支援体制の充実>から<資格の取得率><資格の取得可能種類数>へのフローから、より多くの学生により多くの種類の資格を取得させることが、大学の学生に対する支援体制の充実を示す効果的な方法である、と大学関係者は認識していた。複数のプロトコルからも、高校関係者は教育効果の分かり易い数値等の証拠を示せば納得する、と大学関係者は認識していたといえる。

施設、設備については、抽出された要因:<大学=友人と楽しく過ごす場>から、高校生は、大学を友人と楽しく過ごす場であると捉えている、と大学関係者は認識していることがわかった。また、複数のプロトコルから、友人と長時間過ごす場である学生食堂の快適さを示すことが、大学生生活を楽しく快適に過ごせることを高校生に示す最も端的にかつ効果的な方法の一つである、と大学関係者は認識していたといえる。

## 4. 総合考察

これまで高校関係者と大学関係者についての傾向を考察したが、本章では高校関係者と大学関係者に認識のギャップがみられないかについて焦点をあて考える。高校関係者に効果的な大学評価情報の公開、発信を行うためには、両者の認識のギャップを埋めることが必要である。

両者のプロトコルから抽出されたカテゴリーは、「就職」のみが一致していた。しかし、カテゴリーを形成する要因を分析した結果、高校関係者における保護者と大学関係者の認識は一致しているが、高校教員の認識は全く異なっていたといえる。大学関係者は就職率や、就職した大企業・有名企業の名前の提示など、簡易的で表面的な情報に高校関係者は拘ると認識していた。しかし、高校教員は大企業・有名企業への就職は学生の将来の生活の保障に直結するものではなく、就職後の活躍、充実度がより重要であり、その点が達成されるための能力の開発が可能環境を大学に求めている。このことから、高校教員は大学関係者が認識して

いるより長期的な視野にたって大学を捉えているといえる。

他のカテゴリーについては大学関係者と高校関係者の一致はみられなかった。「偏差値」「先輩による評価」「先輩の様子」は高校関係者にのみに抽出され、「資格」「教育」「設備・施設」は大学関係者のみに抽出された。

#### 高校関係者のみにみられたカテゴリーについての高校関係者と大学関係者のギャップ

「偏差値」については、多くの大学関係者の認識にはのぼっていなかったが、いくつかの大学関係者のプロトコルから、高校関係者は高い偏差値が高い社会的評価と比例すると考え、大学のブランド力が形成され、大学受験はより高い偏差値のクリアが目的とした良いブランドを手に入れる競争になっている、と大学関係者は認識している傾向があるといえた。根拠となったいくつかのプロトコルの代表例を表1に示す。

しかし、高校関係者から抽出されたカテゴリーからは、偏差値＝社会的評価と考えているのは、高校生の保護者のみで、高校生は保護者の説得の

ためのツールとして、高校教員は学生の質を示す尺度として、全く別の観点から偏差値を捉えているといえた。つまり、大学関係者が考える＜大学のブランド力＞が高校関係者に与える影響は大学関係者の認識より少ないといえる。

「先輩による評価」や「先輩の様子」については、いくつかの大学関係者のプロトコルにもみられ、ある程度重要な要因であることは認識していた。その根拠となる大学関係者のプロトコルの代表例を表2に示す。

オープンキャンパスの際の学生の常駐や、出身高校に学生大使としての訪問などを行っていることは、その認識の裏づけといえる。しかし、高校生についてのプロトコルから、高校生にとっての「先輩」とは、信頼できると自ら選別した先輩であり、大学が用意した学生が伝達する情報への関心は低いといえる。この根拠となるプロトコルの代表例を表3に示す。

#### 大学関係者のみにみられたカテゴリーについての高校関係者と大学関係者のギャップ

「資格」については、大学関係者から抽出された

表1 「偏差値」についての大学関係者のプロトコル代表例

	プロトコル
大学教員A	高校生の場合は、あとはパブリックな面でいえば、これだけ社会に取りざたされていながらも、偏差値はあまり言わないんでしょうが、やはりそれで区切られてきている。
大学教員B	要するに、偏差値で上位の学校に、いかに現役で何名入れるかということですか。失礼な言い方もわからんけど、先生方はそこに視点がいつてらっしゃるんだろうな。キャリア教育重要なことはよくわかっている。高校からそういう知識を植えつけて、カリキュラムにもあるからキャリア教育をやれよ。大学に〇〇して、わかりましたよ。そういうふうにおっしゃるんですが、そこからは言葉を発せられないが、私を感じるの、我々は預かった生徒をどれだけ上位の大学へ入れるかが、今の目標ですよ。という言葉をおっしゃりたいのかなという気はします。
大学職員A	私が率直に言いますと、受験生の人気というのは偏差値で決まっているんです。本当に大学の、例えば先生1人あたりの学生の負担率、いわゆるスチューデントレシオがどれだけかということとか、それからどういう研究をやっているとか、そんなことじゃなくて、まずは偏差値。これでブランド力が決まってくるわけです。

表2 「先輩による評価」「先輩の様子」についての大学関係者のプロトコル代表例

	プロトコル
大学教員A	高校生は身近な先輩、いうたら、自分が入ったら先輩になるんですけども、先輩の方からの一言を聞くとかいうのが、やっぱりインパクトが強いです。
大学教員B	学生、先輩といいますが、入学者…在学生が、21世紀プログラムに所属している学生が、高校生にいろいろとコーナーを作りまして、そこで一応高校生の質問に答えたいと来て来てくれています。
大学教員C	だから〇〇のオープンキャンパスのときも、高校生とかを使って、施設を見せたり案内させたりもしているのです。高校生というか、学生を使ってしているのですが。

カテゴリーから、即戦力があると社会的評価が得られるため、資格に執着していると高校関係者は考えていると、大学関係者は認識していたといえる。しかし、高校関係者からは「資格」のカテゴリーは抽出されず、反対に複数の高校教員のプロトコルから、その資格を取得すれば確実に就職が可能となる様な、資格と職業が直結する一部の資格を除いて、大多数の資格は在学中に取得するより、就職後に仕事にあった資格を取得することの方が効率的であると考えていたことがわかった。また、大学が資格取得を重要視するあまり、資格取得のためのカリキュラムに偏り、就職後の仕事の遂行に必要な基礎的な能力の育成をおろそかにしていると多くの高校教員が考えたことがわかった。その根拠を示す高校教員の代表的なプロトコルを表4に示す。

「教育」のカテゴリー抽出からは、大学関係者と

高校関係者の〈大学〉の場についての認識の違いが明らかになった。大学は教員により学生の能力を引き出す場所として高校関係者に期待されていると、大学関係者は認識していたが、高校関係者は大学を教員主導の場というより、学生が切磋琢磨しながら、自律的に能力を開発していく場として捉えていた。高校教員のプロトコルから教員の質に関するものはみられなかったことから、その傾向がみられた。

「施設・設備」については、高校生が重要視していると大学関係者は認識していたが、高校関係者の「施設・設備」についてのプロトコルはほとんどみられなかった。一部のプロトコルからは、高校教員が重要視する点として、実験設備の使用環境の充実がみられた。ただし、重要視される点は、最新の設備が設置されていることではなく、設置された設備を学生が効果的に使用できるか、で

表3 「先輩による評価」「先輩の様子」についての高校生についてのプロトコル代表例

	プロトコル
高校教員A	先輩といっても、自分が知ってる先輩が部活の指導に来てくれた時に、帰り道の雑談のなかで色々聞くとこのパターンが多いみたいですね。
高校教員B	すごい年の上の人というより、自分が中学・高校の時に憧れていた先輩が大学に入ってもっと活き活きしているとその大学に行きたいってうちの生徒は思うみたいですね。

表4 「資格」についての高校教員のプロトコル代表例

	プロトコル
高校教員A	大学を選択するだったら文学部なんかに行ったらしょうがないよと。だから、医学部に行ければいいんですけど、医学部は難しいからまあ薬剤師とか看護師とかそういう選択の仕方ですね。それ以外の資格は意味がないです。大学で資格を取りすぐに専門職として一定の仕事をし、一生安泰みたいな。
高校教員B	医学部だとか、それから看護部とか薬学、文系だと教員免許証だとか、そういう資格は割と気にしている生徒が多いです。
高校教員C	そこまで資格にこだわって、この資格が取れるからとかいうようなかたちで、もちろん理系で医師・看護師・医療系ということはもちろんそういうのを考えていますけど、文系の生徒で、この資格のためにとかということは、あんまりないですね。
高校教員E	社会に出てからじゃないと具体的に必要な資格がわからないと思っている子供が多いですね。
高校教員F	どんな資格なのか実際に働いてみないとイメージわかないんじゃないでしょうか。そうすると就職に有利な資格といわれても子供たちは信用しないわけですよ。
高校教員G	資格は、結局、もうどの大学も取れるように工夫してますよね。だから、どこの大学に行ったら一緒にだし、学生の満足度も幾つかの大学で自分がかかわってよくわかるのは、ほんとの満足度がよく見えないっていうのがありますからね。そうすると、リベラリゼーションはできないですね。
高校教員H	伝統のないところで、言ってみれば教養系のことやっていたって来ないから、だから、もう何か資格みたいなのが取れるってところで、そっちのほうで作っていったらいいですね。ですから、私がアンケートでお答えした中で、●●大学のことを書いたと思うんですけど。●●大学って昔の●●大学と違って、ようするに文学部と教養系の典型的な教養系大学だったのが、今は、薬だの看護だの福祉だの。悪く言ったら資格学校。そんな安易に流れないで、基礎的な教育をしっかりとやってカリキュラムの中身で勝負して欲しいですね。

あった。その根拠を示す高校教員の代表的なプロトコルを表5に示す。

また、高校関係者からは、学生食堂や、お化粧室の充実についてのプロトコルはみられなかった。この結果から、「施設・設備」についての大学関係者と高校関係者の認識にはギャップがあると考えられる。

大学関係者と高校関係者にみられたギャップについての比較表を表6に示す。

#### 効果的な情報公開、発信とは

総合すると、大学関係者の認識と高校関係者の認識にはギャップが主に以下の点で存在することがわかった。第一に、企業名、就職率、資格取得率などの数値、または、建物など、提示しやすい短期的な成果を高校関係者は求めていると大学関係者は認識していた。しかし、高校関係者は実際には、学生の卒業後の仕事における充実度や、先輩の実際の大学生生活の状況など、長期的な視野にたった情報を重要視していた。第二に、大学の場合としての捉え方にギャップがみられた。大学関係者は、教員によって学生の能力を引き上げる場として、教員主導の教育を期待されていると考えていたが、高校関係者は学生が自律的に学生生活を創造する場として、学生主導の場と捉えていた。

これからは以上の様なギャップを意識した情報公開、発信を行わなければならないといえる。大学関係者の多くは、高校関係者が偏差値を偏重し、大学の教育内容や特徴による評価を行わないと憂慮していた。高等学校の進路指導の教員に行った先行研究からも、「偏差値に対する信頼」が「受験産業への依存」の強い規定要因であり、進路指導担当教員の偏差値有用性を認め偏差値を重視した進学指導を行っていることへの問題点が指摘されていた[9]。しかし、この研究では、「偏差値」=「学歴重視」という定義に基づく研究であり、「偏差値」の他の定義についての詳細な検討はされていなかった。しかし、本研究ではその定義を再検討し、分析結果から、「偏差値」とは、社会的ステータスを得るための数値というより、その大学の学生の質や教育環境の質の高さを示す尺度であると捉えていると考えていることが明らかとなった。つまり、多くの高校関係者は大学の特徴を良く把握しており、従来の「学歴重視」という視点からの偏差値偏重ではない冷静な評価を行っているといえる。この様に、大学関係者が大学の特徴が効果的に高校関係者に伝わらないと感じている原因としては、発信している情報の枠組みが高校関係者の視点と異なっているためであると調査結

表5 「施設・設備」についての高校教員のプロトコル代表例

	プロトコル
高校教員A	あとは設備だと思います。やはりマンモスで、何人か一緒になってこうやっている。特に理系なんかでそういうようなことで、実験がしっかりできないというんですか。やることはやるけれども、自分で本当にやって、レポートをどのくらい評価できているかという、やはり人数に制限が出てくると思うんです。そういうきちんとした教育がなされているかという。
高校教員B	理工系だとどういった設備があるかだけじゃなくて、その設備が使えるかが重要みたいですね。●●大学はりっぱな設備は整備してるけど、学部生は使わせてもらえないというのが、その大学にいる先輩たちのなしで、意外にうちの生徒にはばれてますから。
高校教員C	設備っていてもあんまり文系の子は関係ないですね。理工系ですかね、やっぱり関係あるのは。やっぱり研究設備に惹かれていく場合もありますね。でも、あっても使えなければ意味ないですね。

表6 各カテゴリーにおける大学関係者と高校関係者の認識のギャップ

カテゴリー	大学関係者	高校関係者
就職	・就職率・大企業、有名企業への就職	・就職後の活躍
偏差値	・ブランド力を示す尺度・ブランドに対する執着	・学生の質を示す尺度・説得ツール
先輩による評価・先輩の様子	・先輩=大学生	・先輩=自分が選別・信頼する先輩
資格	・即戦力の証明	・基礎的な能力の育成が大事
教育	・大学=教員主導の場	・大学=学生主導の場
設備・施設	・学生食堂・化粧室の「おしゃれさ」	・実験設備の活用度

果からも考えられる。大学関係者は伝えたい内容を高校関係者の視点で発信することを考えなければならない。例えば、多くの大学は教育環境の充実度を説明するために、教職員主導の学生支援体制の充実に焦点をあて情報の発信を行っているが、学生主体の活動や、学生が自律的に能力を伸ばせるように、教員がどの様にサポートしているかを示すなど、学生主導の活動現場を焦点とした情報発信を行うことが重要である。しかし、注意をしなければならないのは、大学関係者が市場型情報に振り回され、市場のニーズにあった情報のみを発信し、ニーズは少ないが、高等教育の質の確保のためには重要である情報を市場にアピールできないからと排除していくことである。大学関係者はその様な情報を排除するのではなく、大学関係者の視点から発信している情報を高校関係者の視点に基づいてアレンジし直し、発信することを考えるべきである。

本調査では面接を手法として適用し、プロトコルは質的分析を行った。分析結果の妥当性を検証するためには、本分析結果に基づく大規模質問紙調査も必要であり、今後の課題といえる。

## 参考文献

- [1] 小林雅之 2003 日本の大学ランキング検証 大総センターものぐらふ, 2, 87-100
- [2] Patton,M,Q. 1997 Utilization-focused Evaluation. Sage Publication, Inc
- [3] 測上克義 1984 大学進学決定に及ぼす要因ならびにその人的影響源に関する研究 教育心理学研究, 32, 228-232
- [4] 古市裕一 1993 大学生の進学動機と価値意識 進路指導研究, 14, 1-7
- [5] 八木晶子・齊藤貴浩・牟田博光 2000 高校生の大学進学動機と進学情報の有用度との関連に関する分析 進路指導研究, 20, 1-8
- [6] 栗山直子・上市秀雄・齊藤貴浩・楠見孝 2001 大学進学における進路決定方略を支える多重制約充足と類推 教育心理学研究 40 409-416
- [7] 齋藤聖子・繁樹算男 2005 アジア太平洋環境の新視点 75-104 彩流社
- [8] Morgan,M., Fishhoff.B.,Bostron.A., Atman.,C. 2001 Risk Communication. Cambridge Univ

Press.

- [9] 豊田秀樹・前田忠彦・室山晴美・柳井晴夫 1991 高等学校の進路指導の改善に関する因果モデル構成の試み 教育心理学研究 39 316-323

(受稿日 平成19年12月17日)

## [ABSTRACT]

The impact of QA information on senior high school members:  
Gaps in mental models between senior high school and university members

SAITO Kiyoko \*

There are gaps in perceptions of useable information concerning university evaluation results between university and senior high school communities. To analyze these gaps precisely, a mental model approach was used rather than the usual questionnaire method. The mental model approach uses semi-structured, open-ended interviews that focus the respondent's attention. As a result, it can be said that gaps exist between the university group and the high school group. University staff perceived that for senior high school students, "results" information (for example, the rate of employment) is important. In reality, however, students are interested not in "results" but in the "process" of developing their ability.

---

\* Assistant Professor, Department of Research for University Evaluation, National Institution for Academic Degrees and University Evaluation